

博物館 アラカルト ⑪

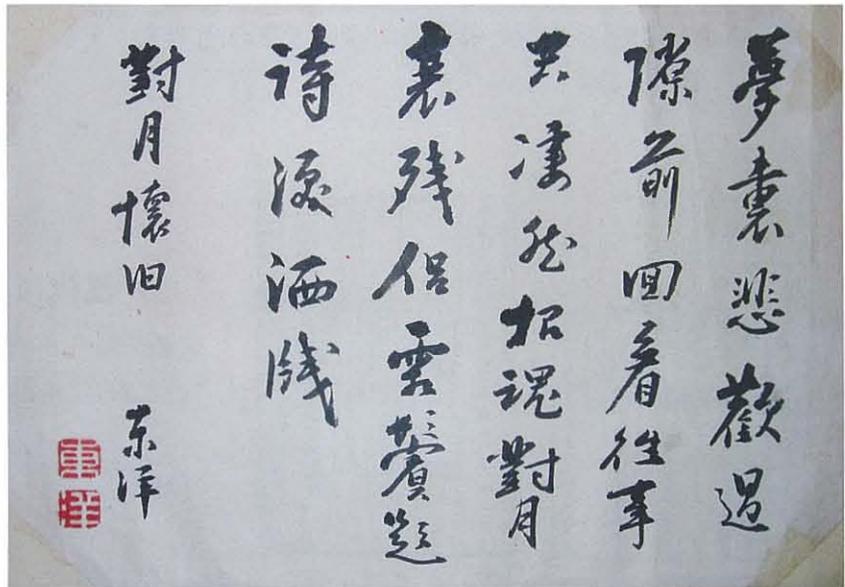
●茶山ゆかりの画家たち—東東洋—

神辺の儒学者菅茶山(1748～1827)と交遊のあった仙台藩の御用絵師であった東東洋(1755～1839)は、陸奥国(宮城県)の出身で、名を俊太郎のちに儀蔵といい、玉峨・東洋・白鹿園と号した。はじめ仙台で狩野梅笑に師事し狩野派の技法を学び、その後京都・長崎で修行をしました。京都へ戻った東洋は妙法院宮真仁法親王の知遇を得て、円山応挙や呉春・皆川淇園ら当時の京都を代表する文人たちと交遊しています。寛政六年(1794)に東洋は法眼位に叙されています。茶山との交遊は、この年に茶山が京都へ遊学した時に始まり、茶山の『北上日記』の中にも東洋の名を確認でき、『雑画卷』に取められる「牡丹図」はこの時の交遊の中で描かれたものと思われます。「法眼東洋」の落款からもそれを推察できます。

写真の「対月懐旧」の詩画は、文化九年(1812)八月に茶山の弟である菅恥庵の十三回忌追善詩画会に寄せられたものです。恥庵は、茶山の親友であった西山拙斎の門で学び、長崎などにも遊学した後、寛政十年(1798)に京都で塾を開き、多くの文人たちと交遊しました。しかし、同十二年(1800)八月に病気で没した。この追善詩画会には、頼山陽・北條霞亭・武元登々庵・

岡本豊彦なども参加しています。東洋の詩とともに寄せられた画は、月もなく、荒涼とした山々が連なる向こうにわずかに「青山」が見えています。「青山」には、「墓」という意味もありますが、恥庵に対する東洋の哀悼の意がそのまま表現されているのでしょう。東洋自身の思いを感じた恥庵は空の上から微笑んでいたことでしょう。

(主任学芸員 岡野将士)



東 東洋 五言絶句「対月懐旧」文化九年
 (『恥庵追悼詩画卷』広島県立歴史博物館蔵)



東 東洋 画「対月懐旧」文化九年
 (『黄葉夕陽文庫』広島県立歴史博物館蔵)